

F2-51

**都心部におけるコミュニティに関する研究**  
**—千代田区神田小川町周辺のスポーツ街をケーススタディとして—**  
**A Study on the communities in the inner city**  
**—As a case study a sports town of Kanda Ogawa-machi, Chiyoda-around—**

○土屋光太郎<sup>1</sup>, 横内憲久<sup>2</sup>, 岡田智秀<sup>3</sup>, 高木宗房<sup>4</sup>

\*Koutarou Tsuchiya<sup>1</sup>, Norihisa Yokouchi<sup>2</sup>, Tomohide Okada<sup>3</sup>, Munefusa Takagi<sup>4</sup>

Abstract: In sports street, I investigated it to extract an element necessary for the formation of the community for the purpose of performing regional activation activity, and, as a result, a-centered thing of the activity was area inhabitants and knew that what you should suffer from with a leading figure was a student.

1. 背景および目的—千代田区は、戦後、減少しつついていた夜間人口が、近年一部のエリアでは大規模マンション開発の影響で、少しずつ増加傾向にあり<sup>[1]</sup>(Table 1), 増加した新しい住民は近隣と関わりを持たない傾向があると示唆される。一方、千代田区では、NPO 法人等に代表される組織による地域活性化活動が行われている<sup>[2]</sup>。しかしながら、地域住民以外による活動は人の入れ替わりにより、一過性のものになる可能性があると考えられる。そのため、石山ら<sup>\*1</sup>の研究にも述べられているように、地域活性化活動は地域住民が主体となって行うべきであり、これにより持続的な活動が可能になると言えよう<sup>[3]</sup>。

そこで本稿では地域住民が主体となり、地域で活動する組織などと共に地域活性化活動を行うことを目的としたコミュニティの形成に必要な要素を抽出する。

2. 研究方法—本稿ではコミュニティの形成に必要なとされる要素の抽出を行うにあたって、千代田区神田小川町周辺のスポーツ街<sup>\*2</sup>を対象(Figure1)に以下の2点に着目し、文献調査<sup>[4]~[8]</sup>およびヒアリング調査を行う(Table 2)。①スポーツ街の歴史を軸とした、まちの移り変わりを把握することにより、地域の特性を抽出する。

②千代田区のまちづくり助成事業の現状を把握することで、今後の地域活性化活動に必要な要素を抽出する。

**3. 結果および考察**

3-1. スポーツ街の歴史—江戸時代、神田には多くの人々が住んでおり<sup>[4]</sup>、住民間の繋がりが多様であったと考えられる。明治時代に入ると1877(明治14)年に誕生した東京帝国大学をきっかけに、多くの大学が設立され、御茶ノ水駅周辺は学生街へと発展していった。これにもない、学生を主な消費者とした古道具屋や道具屋が増加し、その一部は古本街へと変化し、小川町周辺は東京でも有数の繁華街(Photo 1)として成長していったが、1923(大正12)年の関東大震災を契機に衰退した。その後、当時洋靴店であった「ミナミスポーツ」が1924(大正13)年にシャモニーで行われた第一回冬季オリンピックの開幕をきっかけとして、スポーツ用品を扱ったことが、スポーツ街の始まりとされている。そして、第二次世界大戦後、明大通りで道具屋が楽器店へと転身し、発展を遂げるなかで、スポーツ街では東京オリンピックやスキー

Table1. Changes in population

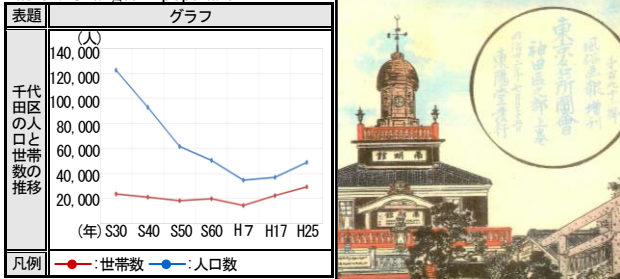


Table2. Outline of the survey

調査方法	文献調査 <sup>[4]~[8]</sup>	ヒアリング調査(直接対面方式)
調査日	2013年7月26日~9月30日	2013年7月26日, 9月18日
調査対象	・スポーツ街を中心とした千代田区全域	・スポーツ量販店 ・神田スポーツ店 ・連絡協議会
調査内容	・時代の変化によるまちの移り変わりの把握 ・まちづくり事業の現状を把握	

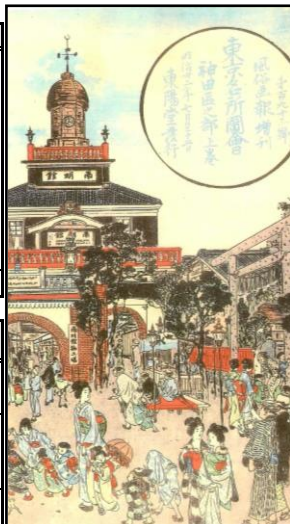


Photo1. Ogawamachi at the time

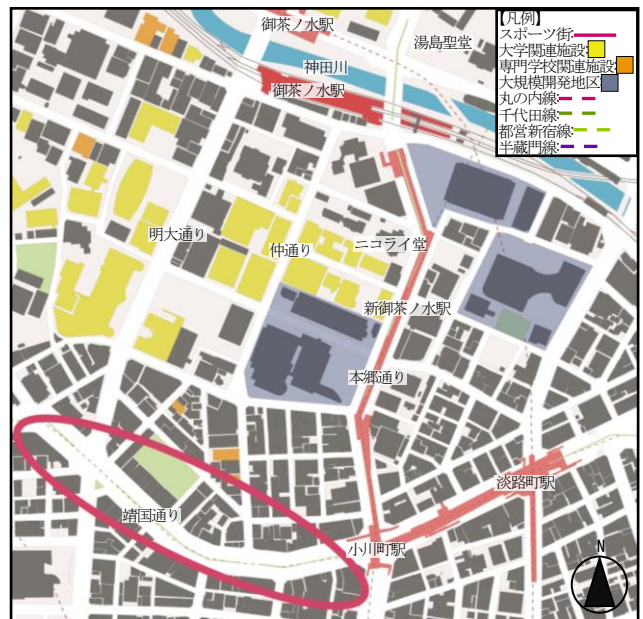


Figure1. Positional relationship of sports town

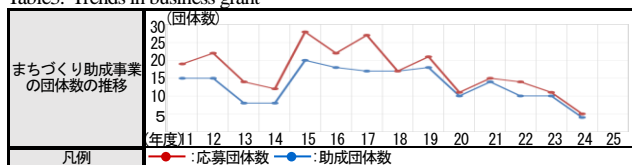
1 : 日大理工・学部・建築 2 : 日大理工・教員・まち 3 : 日大理工・教員・まち 4 : 竹中工務店

ブームにより、次々とスポーツ用品店が増え、1990 年前後には 100 店を超す規模となり、スポーツ街というアイデンティティが形成された<sup>[5][6]</sup>。一方、戦後、大企業の本社などが千代田区に集積して、昼間人口が増加したことに伴い、高度経済成長期にインフラが整備された。また、バブル経済の影響による土地の高度利用に伴い、地価が高騰したことで、家賃や固定資産税などが、払えない住民が増加した。これにより、千代田区に住み続けることが困難になった人々が、インフラの整備により区外への転出が容易になったことをうけ、郊外へと移転していった<sup>[7]</sup>。

そして、新しいアイデンティティであるスポーツ街においても、スキープームの終焉と、不況の影響が重なり、店舗数が減少していった。これをくい止めるべく、スポーツ街のスポーツ店の多くが、1995(平成7)年3月に発足された「神田スポーツ店連絡協議会」に加盟し、定期的なイベントなどの企画・運営を行っている<sup>[8]</sup>が、活動は断片的なものである。また、現在のスポーツ街はスキー・スノーボード用品街というイメージが根強く、冬季以外は集客が見込みづらい現状があり、店舗数も40店舗程に減少している。

しかし、小川町周辺は、千代田区の都市化と共に、住民が減少しながらも、約90年前にスポーツ街がはじまってから、今なおスポーツ街が業態を留めているのは、周辺が学生街であったためであろう。このように、1990年前後と比較するとスポーツ街の活気が失われつつあり、今後もその業態を留めるためには、断片的なイベント活動や冬季の集客に固執した商業形態を続けるだけでは、衰退の一途をたどる可能性があるため、江戸時代や明治時代のような地域住民を主体とした継続的な地域活性化活動が必要であろう<sup>[5]</sup>。

**3-2. 助成事業**—千代田区には「財団法人まちみらい千代田」による助成事業が存在し、千代田区を中心とした、市民レベルのまちづくり活動へ、年度毎に一定額の助成を行っており、2012(平成24)年度で開催数は14回を数え、助成数は184回に及ぶ。この活動の推移をみると、2003(平成15)年度と2009(平成21)年度における助成団体数が、前年度に対して大きく増加している(Table3)。これは、2002(平成14)年に千代田区で制定された生活環境条例による取組みと2008(平成20)年に行われた生活環境条例の強化により、地域活性化活動の気運が高まったためであ



ると考えられる。また、2004(平成15)年度から2007(平成19)年度までの4年間は助成団体数が高い値で安定していることから、活発な助成事業が行われていたといえよう。この4年間の特徴としては、応募団体の多くに学生団体や学生と提携していた団体がみられたことがあげられる。そして、年度毎に有意義な活動を行った団体に送られるサポート大賞の大半が、学生に関連にした活動を行った団体であったことから学生が担い手となる地域活性化活動は有意義なものであると言えよう<sup>[2]</sup>。

しかし、学生の特徴として、在学期間を終えると、地域から離れていく傾向にあるため、その後の団体数が減少していったと考える。なお、全盛期には20団体に及ぶ助成団体が存在し、活動内容は地域の課題を把握し、改善していくものが多くみられたが、昨年度の助成団体は4団体のみであり、活動内容の半数以上がスポーツやバリアフリーなど、地域固有のものから一般的なものになりつつある。そして、助成事業の対象数が年々減少していることなどから、本年度の助成事業の開始は下半期まで持ち越されており、事業存続の危機となっている<sup>[2]</sup>。

これらのことから、千代田区の地域活性化活動は行政の取り組みによって一時的に気運が高まるが、継続的な活動は困難であり、社会情勢により気運が左右される傾向があると言えよう。そのため、地域住民が主体となる、継続的な地域活性化活動が必要であり、その担い手となるべきは学生であろう。そのためには、学生が地域活動に入りこんでいくための、継続的なきっかけの場が必要であり、これは、学生が地域に入りやすいように、大学機関が地域活性化活動と連携をとることが有効であると考えられる。

**4. まとめ**—以上より、千代田区及びスポーツ街の地域活性化の気運が下がりつつあることは明確だと言える。また、スポーツ街をはじめとする地域のアイデンティティが失われることは、コミュニティの衰退へとつながる。そのため、継続した地域活性化活動の主体となるべきは地域住民であり、学生と共に発展してきたスポーツ街の地域活性化活動の担い手となるべきは学生であろう。

**5. 補注・参考文献**

※1 石山らの研究によると、市民を活かしたまちづくりは「連携不足」などによる諸問題解決の一助になると述べている。  
 ※2 本稿では千代田区神田小川町の靖国通り付近に集積するスポーツ用品店を総称して、スポーツ街と指す。  
 [1] 千代田区 HP <http://www.city.chiyoda.lg.jp/>  
 [2] 千代田 day' s HP <http://chiyoda-days.jp/>  
 [3] 石山拓実ほか2名:「宮城県塩竈市における復興まちづくりに関する研究」,日本大学理工学研究科不動産科学専攻修士論文梗概集, pp.15~20, 2013.3  
 [4] 森田暁ほか1名:「関東大震災後の繁華地区・神田の衰退に関する研究」,平成23年度日本大学理工学部学術講演会論文集, p.449, 2011  
 [5] 西本碩司:「世界有数のスポーツ用品店・楽器店街でもあるこの街のルーツを探る」,荷風!神田神保町, 御茶ノ水の究極, pp.71~76, 株式会社日本文芸社, 2006.3  
 [6] 新井巖ほか4名:「神保町地区、神田公園地区」,千代田まち事典, pp.61~89, 千代田区民生生活部, 2005.3  
 [7] 福富由浩:「千代田区における過疎化の過程および過疎化がもたらした地域コミュニティの衰退とその再生」,早稲田大学卒業論文, pp.9~22  
 [8] 神田スポーツ店連絡協議会 HP <http://www.sports-kanda.com/>